

「やる気を引き出す」マネジメント

P.F. ドラッカーに学ぶ対話型人財育成

vol.10

地域を支える“自信と誇り”を持って働く

遠藤 彰（株式会社BEANS 代表取締役／中小企業診断士）



今回は、佐賀県伊万里市に本店を構える伊万里信用金庫・中山武重理事長にお話を聞いた。ご承知のとおり伊万里市は、江戸時代に陶磁器の積出港として栄えたまち。1925(大正14)年商店街の店主たちが出資して設立されたのが伊万里信用金庫の始まりである。気さくな人柄の中山理事長は、街を歩いていると地元の人たちから気軽に声を掛けられる。伊万里商工会議所の会頭も経験されており、地元に対する強い思いがある。

同金庫の経営理念は、①地域の産業・経済の発展②地域住民の文化の向上と豊かな未来③社会的評価の向上④信用・信頼・信任される人材育成である。この理念に徹底的にこだわった経営を展開し、全ての職員が日々の仕事の中で実践できる組織を目指している。「伊万里しんきんブランド力の向上」を合言葉に、地域での存在感を高める施策を次々に実行している。

まず手掛けたのが本店の駐車場を地域に開放して開催する「雑貨市」である。出店者は、ハンドメイドの雑貨や木工製品などそれぞれが工夫を凝らした商品を販売する。飲食店の出店もあり、毎年2千人から3千人の来場者が訪れる。この雑貨市をきっかけに販路の拡大や新規取引先の開拓につながるケースもあり、地域企業のビジネスチャンスとなっている。第1回「雑貨市」と同時開催されたのが商店街で行われる三輪車レースである。幼児用三輪車を使い、小学校低学年、高学年、一般の部の3部門に分かれて競われる。「今は少しさびれてしまっているが、この商店街がなければ伊万里信用金庫は存在しない。意味のある取り組みである」と理事長は語る。そして一昨年から始めたのが少年野球大会である。経営理念の具現化を日ごろから考えるようになった職員が、地域の皆様に喜んでもらい、「伊万里しんきんブランド」を高めるためにと思いついた企画だ。企画・運営から試合の審判まで、全て職員が担当する手作りの野球大会となった。

その他にも地元ケーブルテレビと連携して取引先を紹介する番組を制作するなど、さまざまな取り組みを行っている。ここで特筆すべきことは、これら全ての

企画が職員の発案で行われていることである。経営理念へのこだわりを強く打ち出し、職員に意識付けを行うことによって「地域のために、顧客のために、自発的な行動が起るようになったことが収穫である」と理事長。全職員が週1回、朝礼で経営理念の唱和を続けているという。

同金庫では、地元金融機関の存在感のバロメーターとして融資量にこだわっている。営業戦略では、課題解決型金融を提唱して知恵と汗を出す営業を展開。特に、顧客の商品・サービスの付加価値を高めるための設備投資に積極的に取り組んでいる。公的支援機関と連携して補助金のメニューを提案し、計画策定から補助金申請まで関わることによって顧客の信頼を得ている。そのような地道な活動により、伊万里市の融資シェアは4割近くあり、佐賀銀行を抑えてトップシェアとなっている。

理事長が明確に示された「経営理念」のもと、組織が地域に対して果たす役割と自らの貢献を意識しながら働く職員一人ひとりの姿が浮かんでくる。ドラッカーは、著書『非営利組織の経営』の中で、「(働く人たちに)リーダーが約束すべきことは、機会の提供である。自己実現の機会、そして、働きがいのある共同体の一員となる機会。機会というものを考えずに活力ある組織をつくることはできない」(要約)としている。まさに、中山理事長が示すリーダーの姿だ。信用金庫の存在感とは、“職員の魅力”で決まる。全ての職員が“自信と誇り”を持って働くことが、地域への貢献につながる。

リーダーが約束すべきことは、機会の提供である。自己実現の機会、そして、働きがいのある共同体の一員となる機会である。機会というものを考えずに活力ある組織をつくることはできない。

(『非営利組織の経営』ダイヤモンド社)